

線香花火をたずねて

皆川美恵子

子ども時代の夏の夜、庭先の夕闇の中で、花火をしたことがないという人も、まれなことでしょう。

さてその花火の代表は、何といっても線香花火ではなかったでしょう。静かに、ただじっと持っていればよい線香花火は、小さな子どもでも安心して遊べる、優しく美しい花火です。

この線香花火は、一体どのように作られているのでしょうか？
線香花火の職人さんとは、どんな人達なのでしょう？

私達は、大きな文化の蔭に隠れて、子どもたちの遊びをささやかに支え続けている、職人さんの姿といったものを、これからシリーズで探訪してみたいと考えています。

その第一回として、線香花火をとりあげました。線香花火を作っている人を尋ね求め、長野県は長野市の北上玩具花火製作所、北上松三郎さんをお訪ねし、いろいろとお話を聞かせていただき

ました。

北上さんの家

北上さんの家が花火師となったのは、おじいさんの代からで、おじいさんは、本所にあつて今はつぶれてしまった蜂谷はちやという花火屋で修業をされたそうです。そしてお父さん（五三郎さん）の代の時、独立して、亀戸に北上玩具花火という店を構えました。

線香花火は、火薬の配合を花火師がやり、紙も染めて、ただ燃りこむだけにして手内職に出します。細長い紙に火薬を巻きこんで、こよりを作るこの燃り子の内職は、当時、大島、市川、船橋あたりに頼んでいたそうです。

お父さんの時でも、東京で線香花火を作る人はだんだん少なく

なり、とうとう北上さんのところ一軒になってしまったそうです。そこへ関東大震災（大正十二年）にあつて家を焼かれ、燃り子さんを捜すにも東京周辺では難かしくなってきたこともあり、長野へ移り住むことにしたそうです。

雪国の花火

長野は、線香花火が盛んに作られている地でした。しかし、「だるまより」という、粗悪な線香花火が作られていて、悪いということにかけて評判のところでした。北上さんのお父さんは、燃り子さん達に、火薬を巻きこみ、燃りこむ技術を伝え、いい線香花火を作る指導をしていったということです。その苦労が実つてか、長野の線香花火は汚名を返上していきました。

長野では雪の降る冬季になると、閉じこめられた家の中で、内職仕事として、村中の人達が線香花火を燃りました。小学生の子ども達も、親の手仕事を傍で見え覚え、燃っていったといいいます。線香花火は万が一火がついたとしても、爆発するとかいった危険なものではありません。みんな炬燵こたつに足を入れ、色鮮かな薄紙に火薬を燃りこんで、夏の夜ときめかしい一瞬の光の世界を作り出していったのです。

こういう話を聞いたせいでしようか、線香花火のチッチッと出る赤い火の花が、雪の結晶の形に見えてきました。雪の降るなか、静かに燃らされた線香花火には、いつか雪の一ひらの美しさまでが閉じこめられてしまったように感じられるのです。

昭和はじめの景盛期

今から五十年前程前の、昭和のはじめ頃が、北上玩具花火の、そして信州の線香花火の最も花々しい時代でした。長野県は当時、全国で生産される線香花火の八割から九割を作り出していたのです。その頃は燃り子さんもたくさんいて、雨宮あまのみや、生萱いけがや、倉科、土口、森といった村々では、盛んに線香花火が燃られていたそうです。

多くの燃りさんがいたこと他に、その当時は材料が良かったといえます。線香花火は、中に入れる火薬の配合と、紙そのもの、そして燃り方と、この三つのバランスによって、良いものが生まれてきます。

当時は、マニラ麻の入った紙が使われており、この紙は燃えると麻が灰になり、その灰が火薬に作用して、美しい火花が出たそうです。しかし今では、マニラ麻の入った紙はなくなっています。

い、新改良の薄洋紙になってしまいました。

火薬は、硝石、硫黄、松炭の三味を配合した、火薬として最も素朴な黒色火薬です。この中で松炭が一番の要かなとなります。松炭が悪いと「花」の出も悪く、ポトリと玉が落ちてしまうそうです。松炭は、赤松を焼いて作った炭を細かく砕いたものですが、暖かいところに生い育った赤松の方が年輪も少なく、やわらかく、細かな粉になりやすいので望ましいそうです。

昔の花火職人は、炭まで自分で焼いたそうです。お父さんの時は、もう焼かれた炭を仕入れ、挽き臼で砕いて使っていたといえます。しかし、北上（松三郎）さんの代になると、炭の形では来なくなり、粉々にされて袋詰で入ってきます。こうなるともう、それがはたして百パーセント赤松の炭かは疑わしくなり、材料の吟味はできなくなってしまっているといえます。

一本一本ちがう線香花火

硝石が吹き出し、硫黄がまき上げ、そこで赤い丸い火の玉がつかれます。松炭の粉は燃えて松煙となり、はじめて火花がきれいに出来ます。火鉢が使われていた頃、炭をつく時に粉が入って、パチパチと火の粉が飛んだことを覚えていらっしやるかと思いま

すが、あの火の粉が花になるわけです。

北上さんは、おじいさん、お父さんから受け継がれた秘伝で、硝石、硫黄、松炭を配合してゆきます。しかし、線香花火とは不思議なもので、同じ時に作った同じ火薬をつめても、紙の撚り方で、ひとつひとつ花の出方が違ってしまいます。いくら熟練した撚り子さんが撚っても、こよりを作り出す、手の先の絶妙な動きは、二つとして同じこよりを撚ることがないのです。

ですから、はたして花が美しく出るかどうかは、火をつけてみなければわからないことになります。線香花火は一本一本、その時その時に、それぞれに火の玉をつくり、花を出し、消えていくのです。きれいな花をたくさん出すには、火薬を多くいれても駄目で、あくまで火薬と紙と紙の撚り方の、三つの均整がとれていなくてはなりません。しかしこの三つの関係のはっきりとした物理的、化学的な理由はわかっていません。北上さんも配合はしているけれど、どういう訳なのかはわからないといえます。

しかし、それにしても、昔の線香花火はきれいだったと思われる年配の方がいられるとしたら、どうやらそれは本当のようです。美しかったのは何も幼い日への郷愁だけではなく、当時、松炭といい、紙といい、最良の材料が使われていたのですから、最も美しかったはずなのです。残念ですが、現在は、代用品

の時代なのです。

線香花火の将来

線香花火は、長野県のほか、愛知県、福岡県で作られています。その生産高の割合は、福岡が八十パーセント、長野が十五パーセント、愛知が五パーセントです。五十年前には、八割から九割を作り出していた長野が、数の上でも大きく後退しました。

北上さんのように、通産省の国家試験や消防法の試験を受けて合格し、免許資格をもって線香花火を作っているのは、全国で六、七人位だということです。

花火師が少なくなっていますが、何といっても撚り子さんがいないということが、一番の痛手のようなのです。現金収入のなかった農家の人は、冬の農閑期に内職仕事として線香花火をつくりました。しかし今では、近くにできた工場にパートで働きにいたり、出稼ぎに出たりしてしまっています。千二百本の線香花火を撚って三百九十円という工賃に、今では誰も魅力を感じないので

す。
北上さんは撚り子さんを捜して、新潟県に近い横倉という村や、長野県でも秘境とされている秋山郷にまで足をのびし、何と

か撚り子さんの確保に努めています。息子さんが後を継ぐようですが、撚り子さんがいなくなれば、やめるより仕方がないでしょうねと、北上さんは淋しそうにおっしゃっていました。

現在では、中国製の線香花火が増えているそうです。これは、中国の安い労働力を利用して、日本の大きな花火業者が向うへ行って、作り方を指導して作っているのだそうです。ですから、日本独特の線香花火が、もしかするとみんな中国製という時代が、やってくるのかもしれない。

北上さんは、次のように言っていました。

——僕なんか中国行ってやりたい位ですよ。中国の方が教えればうまいかもしれない。要所さえ教えれば……。ただ本心に教えないから、色も悪いしね。

——本当はね、筆のように太くて、先の方にいって細くなるのがいいんです。ずっと燃えてきて、固くなって力が出る、それがいいのね。

私達は、北上さんの家の庭になったという杏の実を御馳走になりながら、いろいろお話を聞いてきました。次に、前もって、お願いしておいた、線香花火が実際に作られるところを見せていただきました。北上さんは、私達の願いに応じ、長野で一番上手に

線香花火を燃る人を、呼んできて下さったのです。近藤梅野さんというその人は、杏の里として名高い森村の隣、雨宮あまみやの方です。

近藤さんの手際

近藤さんは、膝に、木でできた菓子箱のフタのようなものを置きました。その中には、黒い煙硝えんじょう（火薬）の入ったカンと、松ヤニの入った小さなカンがあり、フタのようなものは、煙硝がこぼれて、まわりを汚さないための台になります。

まず、こよりを作るのに指がすべらないよう、松ヤニを指先につけました。この指に松ヤニをつけるといいということは、北上さんに教わったということです。

次に、きれいに染められた長細い紙の、やや幅の広い方を左手に持ちます。そしてその広い部分に、粉の煙硝を置き、左手で巧みに捻り込みながら、右手も使って、細い細い、ピンと張った針金のようなこよりを作っていきます。このように、近藤さんの手によって見る間に、いとも簡単に捻り出されたこよりこそが、線香花火なのでした。

煙硝をすくう匙の柄は、匙をいちいち置いたり、とったりする手間を省くため、右の薬指にはまるよう、丸くなっています。こ

の小さな匙で、ちょうど一本分の線香花火の煙硝がすくえるようになっていのです。北上さんに尋ねると、〇・〇三グラムというのでした。

下手な人が捻った線香花火は、台の上でトントンと整えると、黒い煙硝が落ちてくるそうです。また、こよりがブカブカで、ピンと堅いこよりになっていないそうです。

近藤さんの捻った線香花火は、煙硝がしっかりと捻り込まれており、堅く細く、ピンとまっすぐで、一級品です。悪いものと手元で比べてみ

注意とお願い

- と、その太さ、長さで一
- 一、火気に充分注意し災害を起さない様にして下さい
 - 一、材料はよく整理して無駄のない様にお願ひします
 - 一、より方は固く仕上げは立派になる様努めて下さい
 - 一、薬は適量（多くなく少なくなく）に入れて下さい
 - 一、売りものにならない様な不良品は特に作らぬ様お願ひします
- 分、短かくな
- ◎ 不良品には工賃割引と支払えない場合と材料御返戻申しますので御了承下さい
- ってしまおうです。

各位

北上さん

1. 先から②③は不良品に
2. ①の多量な煙硝は少なく
3. ①の板を堅く

4. 余たい堅くより仕上げよく



は、皆が上手に燃れるよう、図のような注意と、燃り子さんへのお願いを印刷して配っています。

でき上った線香花火は、十二本が一束となり、その小さな束が五つ（六十本）で、大きな束一つとなります。そして大きな束が箱の中に二十束（千二百本）詰められ、¹「ほまれ桜」として出荷されています。

近藤さんは、この一箱分千二百本を、四時間で燃らすことができるといいます。つまり、一分間で五本を燃らすことになりま

す。長年の内職で身についた、全くあざやかな手の動きです。繰り返しますが、こうした一箱分千二百本の工賃が、三百九十円なのです。そしてお店で私達は、その一箱を千円で買うのです。それにしても、今どき、手作りの、こんなに美しい火の松葉を咲かす線香花火を、一本一円以下で楽しめるとは、何としあわせなことでしょう。

私達がじつと手元を見つめるなかで、近藤さんは、次から次へと線香花火を燃っていきます。色鮮やかな線香花火の山は、どんな大きくなっていききました。見とれてばかりはいられません。

私達は近藤さんにあれこれ尋ねてみました。

近藤さんの話

——私、全然やったことがなくて兩宮^{あのみや}というところへ嫁いの。ところがねえ、お父さん一人の稼ぎなわけだけど、そのお父さんの職がいい職じゃなかったから、お金が少なかつたわけね。その時、こういうのをやったらどうかと教えてくれる人がいたわけ。その当時は安かつたんだけど、それでもやれば何かの足しになると思ってやったの。

教えてもらった時は、この手の中マメだらけ、叱られて一所懸命やったの。その教えてくれた人は、沢山できると、自分も儲けになったみたい。

——嫁いでの話だからさ、二十七年ばかなるよ。ずっとはやってなくともね、やめっこなしね。

肩こる人は荒っぽくなっちゃうから、駄目でしょうね。私そういうこと全然ないの。おもしろいせいか、夜なんか、いつまでもやってるの。

私、一日にやろうと思っててもね、千二百を三把^ば、それ位だね。だけどこれが安いか考えたことないね。金銭問題でさ、安くてこれは内職に向かないとかさ。

若い人は、一日出りゃいくらになるとか考えるから、そばでやっていると、やる気ないね。見ていたってやらないねえ。

——買う人の身になってやらなければねえ、自分ばかりお金になりゃいいというもんじゃありません。だからここ（煙硝を入れてとめる根元を見せながら）を完全にやらなくちゃねえ。

——昼間は会社行っているから。でもこうしてお金を頂くこともさ、とても助かるんだよ。そしてその都度頂けるでしょ。会社に勤めて何万と頂いてもね、この金はとっても有難いと思っっている。ちょっとのすき間にやった仕事でしょ。だからあんまり使えない。

——それこそ張りあいだね、取り来てくれれば、もういくらになるという気持ちで……。来てくれた時は、もう少し頑張っつてやってあげばよかったですなんて。このお金は尊いもので、それこそ簡単には使えないね。かえってお父



さんに働いてきてもらった金より尊いからね。だから、これは絶対に出不さんないよ。自分に貯めてというか、そういう気持ちになるね。苦勞してやるんだから……。

美しい一本一本のこよりに二十七年間、近藤さんは、どんな気持で向かい、紙を細く撚り上げ続けてきたのでしょうか。

せつせと手先を動かすことで仕上ってゆく、夏の夜の子どもの花火作りが、どのように近藤さんの中で安らいだ気持ちになっっていたのでしょうか。

何はともあれ、こうして子どもたちは、今、その線香花火を手にかけるのです。

日本煙火協会

北上さんの家族の方々、それに近藤さんの協力によって、私達はこのように取材を終え、帰ってきました。次に記事を書くにあたり、いま線香花火がどの位、生産されているのか、又、線香花火はいつ頃から作られるようになったのかを知るため、日本煙火協会を訪ねました。

日本煙火協会は、松尾義雄さんという、相当なおとしのよう

すが、電話の前に坐って現役で活躍されているおじいさんが、取仕切っていられます。北上さんを紹介して下さったのも、この松尾さんでした。

早速、線香花火の生産高を尋ねてみると、おもちゃ花火の生産高はわかって、そのうち線香花火がどの位かは、正確につかめないということでした。しかし、推量するなら、小売価格での売り上げが一年間で一億五千万円位だろうということでした。

さて、松尾さんに線香花火のことをいろいろと尋ねていて、思ひもかけないことを知らされました。関東と関西では、線香花火が違うのだということです。この世の中に、紙でできた線香花火のほかにも、もう一つ線香花火があるということです。「本当ですか！」と声が上がると、私にとって驚きでした。

松尾さんの話では、関西の線香花火は、畳表にする藁草の先や稲の藁の先に、火薬をつけたものだといえます。関東に広まっている線香花火は、粉の火薬を紙こよりに巻きこみました。しかし、関西のは、火薬を泥薬にして、藁草や藁の先に黒く塗りつけるのだそうです。

関西の線香花火は、大阪、九州で多く作られています。火薬を泥薬にするのは危険なため、手内職ではなく、昔から工場で作られてきたそうです。

長野の、手仕事でしか作ることでできない紙燃りの線香花火は、人手が少なくなってしまう現在、生産が急激に落ちてしまっていました。しかし、関西の線香花火は、工場で大量生産されるため、今でも多く作られているということです。

二つの線香花火

なにはともあれ、関西の線香花火を見てみたいと思ひ、浅草橋のおもちゃ問屋に行ってみました。なるほど藁草の先に黒い薬がついています。赤、緑、黄、桃といった華やかな線香花火を見慣れている目には、素朴にも、質素にも感じられます。お店の話では、この品は、東京では置いても売れないとのこと。逆に関西では、紙燃りの線香花火が売れず、この品がよく出るといふことでした。

関東と関西の二つの線香花火をもって、まわりの人に、どちらが線香花火かを尋ねてみると、富山、兵庫、京都といった西方の出身の人は、藁草のを線香花火と言ひ、東京、新潟、北海道といった東国出身の人は、紙燃りの線香花火と言ひます。どうやら線香花火は、西と東、二つの文化ではっきり分かれるようです。

私達は、線香花火の探訪をするにあたって、紙燃りの線香花火

しか頭にありませんでした。しかし、関西出身の方は、この記事のはじめを読んで、私達の線香花火とは違うなとおかしな気持ちをもたれたことでしょう。

考えてみれば、人と人が出会い、幼い日をどのように過ごしたかを語り合うのは、明日に向かって忙しく生きている私達には稀有なことなかもしれません。ましてやその子ども時代、夏のひとときを、どんな線香花火で過ごしたかを語り合うのは、稀有なことの中の稀有なことと言えるでしょう。

蘭草の線香花火で遊んだ関西育ちの人達は、あれこそ線香花火と思い、紙燃りの線香花火で幼い日を過ごした関東の者は、これこそ線香花火と思い、それぞれが、それぞれの線香花火の思い出をもつて、生い育ってきたようです。線香花火が、西と東という二つの文化を背負っていることには少しも気づかずに。それにしても誰でもが知っている線香花火がこのようにかけ離れているとは、線香花火が、幼い日の暗闇で、一瞬美しく散り輝いては消え、ささやかな、ささやかな片隅の遊びだと言えるのでしょうか。

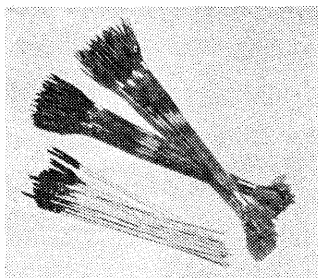
スボ手ぼたん、長手ぼたん

さて線香花火と一口でいっても、二つの線香花火は、持ち方が

ら、花の出方と大いに異なります。関西の線香花火、関東の線香花火と言っているのは、まだろっこしくてなりませぬ。そこで、おまちゃ問屋さんが呼んでいるように、関西の蘭草や藁を使った線香花火を、スボ手ぼたん、略して「スボ手」、関東の撚りものの線香花火を、長手ぼたん、略して「長手」と呼んで話をすすめることにしましょう。

「スボ手」のスボとは、「窄すまむ」から来た語のようで、細長く、穴のあいているといった意味があるようです。藁、葦、藁などを言ったものと思われます。この「スボ手」は、斜め上向きに持ちます。そして、火がつくと、ジュッと勢いよく火を噴き出し、盛んに松葉が出ます。初めがはなばなしく、すぐさめやすい人を見れば、線香花火のようだ、と言いますが、どうもこの「スボ手」のように思われます。

しだれ柳が出て終りになると、蘭草の小さな管から出たモウモウとした煙で、手が臭くなります。慣れない者が臭いというだけで、人によれば勿論懐しい匂いであるはず。この蘭草の燃えた匂いを初めて嗅いだ人が、「狼の匂い



みたい」と言っていました。

「長手」は、「スポ手」より長いことから呼ばれたのでしょうか。十五・五センチメートルに対し、二十一センチメートルと五センチ以上長めです。これは、下向きに持ちます。燃りが効いているため、火の伝わり方も一様ではなく、チチチ——チチ——チチと松葉と松葉に間が生じます。燃りは一度に噴出する力をとめて、起伏をつくり出しているのです。

「長手」の特色は何といっても、こよりの色どりにあります。赤、緑、黄、桃といった鮮かな色は、たぐ瓜やこさ独楽、リリアン、海はおずきの色であり、弟、妹と奪い合ったそうめんの幾筋かの色です。これらの色は、子どもたちにとって、胸がふるえる位に美しい、魔法の色なのです。

さて、「スポ手」と「長手」、どちらの線香花火が古いのでしょうか。

蘭草を用いた上向きに持つ線香花火に比べ、下向きに持ち、燃ることで力をとめた線香花火の方が、女、子どもでも、たやすく遊べる、より安全な花火と言えそうです。それに子どもにも色に染まった線香花火には、文化文政の華やかな時代の影響が感じられます。

ですから私には、「長手」の方が、「スポ手」のあとに生れたも

のと思われてなりません。しかし、このことは、まだはつきりとはわからないことです。燃りものの「長手」の方が先だと考えている人もいます。

最後に、皆さんは、「線香」という名がどうしてついているのか不思議に思わなかったでしょうか？ 東南アジアを旅行したところのある人が、はじめて、関西の「スポ手」の線香花火を見て、これは、向うの線香にそっくりだと言いました。その人によると、東南アジアの線香は、キリタンボのように、木の周りに香料が塗りつけられているのだそうです。

下向きに持つ紙燃りの「長手」からは、線香という言葉は出てこないと思います。そういうこともあり、「スポ手」の方がまず線香花火として古い形なのではないかと考えています。線香花火の歴史は、説明していると、まだまだ長くなってしまうので、すから詳しいことは次の機会にまわすことにしましょう。

ただ一本の線香花火に、火薬を中心とした鉄砲などの軍の歴史、又、一年に一度祖先の霊が帰る盆の供養という宗教の背景、それに喜々として興ずる子どもの遊びが、互いに織り混ぜられていることは、注目していいのではないかと思います。夏の夜の片隅の、子どもの手遊びである線香花火には、意外にも大きな文化が潜んでいそうです。